188　猿長者（ロ）

いちばんのー金持屋んかい泊まらちとうらしんち来ゃくとう、金持屋や、
「今日や年夜るやるむんぬ、他人泊まらするくとーならん帰り」んち、帰さってーるばーてー。
また隣や、貧乏者やたくとう、隣ぬ家かい行じゃくとう、隣ぬ貧乏者のー、
「私たーやなー、食むる物ぬん無らん、年ぬ夜やなー火燃ち、年取らやーんちるやるむんぬ」ちゃくとう、
「泊まらりーるうっぴし、しむさ」んち、うまぬ家んてぃ泊またくとう。
今度なー、神様るやくとう、魔法使いぬぐとうし、御馳走ん出じゃち、食まちさくとう、翌日ぬ正月えーや、
「いったーが希望通い、大金持るないぶさるい、また

一番最初は金持の家に泊めてくれと言って、来たので、金持ちは、
「今日は、大年の夜だのに、他人を泊めることはできない、帰ってくれ」と言って、帰されたそうだよ。
それで、隣は、貧乏だったので、隣の家に行くと、隣の貧乏人は、
「うちはもう、食べる物もなく、年の夜は火を焚いて、年取りをしようと話しているんだよ」というと、
「泊まれるだけでよいから」と、そこの家で泊まったそうだよ。
つぎにまた、神さまだから魔法使いのようにして、御馳走を出して、食べさせて、翌日のお正月には、
「あんたたちの希望どおり、金持ちになりたいのか、

若くるないぶさるい」んでぃち、徳くぃらやーんちゃくとう。
「私たーや、銭のーいらんしが、若くならりーね若くないせーまし」んでぃち、おじいさんとぅおばあさんが、あん言ちゃくとう。
「あんせー大鍋んかい湯沸か」ち、うぬ神様ぬおじいさんが、浴みしたくとう、夫婦なーにーせー、みやらびなてぃ、若くなてーるばーてー。あんさーに、うったーや、「隣ぬ金持家んかい行きよー」んちゃくとう、隣ぬまた欲深ぬおじいさんぬんおばあさんぬん、
「ちゃーし、若くならりーたが」んちゃくとう、昨夜ぬおじいさんぬ話さくとぅやー、
「あんしる若くなたんどー」でぃちゃくとう。
またうぬ金持者ぬ、今度後追うてぃ、
「あんし遠さーめんそーらんくとう」んでぃやーに、走えーし、くぬ神様ぬおじーさん、自分ぬ家んかい引ちむどうち来。

あるいは若くなりたいのか」と言い、徳をあげようねと。
「うちは、お金は要らないが、若くなれるのなら若くなるのがいい」と、お爺さんとお婆さんは、言ったそうだ。
「それでは大きな鍋にお湯を沸かしなさい」と、その神さまのお爺さんが、湯を浴びせたので、夫婦は二十の青年と娘になって、若くなったそうだ。それで、その人たちは、「隣の金持ちの家に行きなさいよ」と言うので、隣のその欲深のお爺さんやお婆さんも、
「どんなにして、若くなれたのかね」と言うので、昨夜のお爺さんの話をすると、
「それで若くなったんですよ」と、言うと。
その金持ちが、こんどは後を追って、
「あまり遠くへは行っていないからと」言って、走って、その神さまのお爺さんを、自分の家に引き返して来て。

今度浴みたくとぅ、むる動物んかいなたんでぃるばー。

あんさーに、神様やなーまた、うぬおじいさんおばさんやむる、動物なてぃ居らんくとぅ、

「うぬ家やいったー住まーりよー」んでぃち、金持者ぬ家や、貧乏者ぬおじいさんおばあさんぬ住まいるくとぅなてぃから、二三日待っち、

「変わたくとーねーらに」んでぃち、また、めんそーちゃくとぅやー、

「別に変わったくとー無らんしが、一匹ぬ猿がやー、庭んかい入っちっ来、庭んじ私家返りし、私家返りし、うまうてぃ鳴ちゅんどー」んでぃちゃくとぅ。

「あんしやらー、黒石焼ちやー、石焼ち、しーねー、翌日うりんかい座きーねー、来んないくとぅ」んでぃやーに、石焼ち待っちょーたくとぅ、うまんかい来、座っち、

「私家返りー」し叫びーしが、石焼かってぃ、うぬまーまなー、赤尻なてぃ、逃ぎてぃ、去たんでぃ。

あんしる猿ぐわーや、赤尻なとぅんでぃ言いんどーんでぃる話。うれーおじいさんから聞ちゃん。

字小波蔵　伊敷フヂ子

それでお湯を浴びると、みんな動物になったということだよ。

それで、神さまはまたもう、そのお爺さんやお婆さんたちは、動物になつてしまったので居ないから、

「その家は、あんたたち住みなさいよ」と、金持ちの家は、貧乏人のお爺さんお婆さんが住むことになってから、二、三日経って、

「変わったことはないか」と言って、また、おいでになったので、

「べつに変わったことはありませんが、一匹の猿が、庭に入って来て、庭で私の家を返せ、私の家を返せと、そこで鳴きますよ」と言うと。

「そうなら、黒石を焼いて、石を焼いて置くと、すると、翌日それに座って、来なくなるから」とおっしゃって、石焼いて待っていると、そこに猿が来て、座り、

「私の家を返せ」と叫ぶが、石が焼かれていて、そこに座ったので、そのままもう赤尻になって、逃げて、行ったそうだ。

それで猿は、赤尻になっているんだよと言う話。それはお爺さんから聞いた。